

Cure to Care 第 1 話

與儀 達朗

【登場人物】第1話

町田 翼（32）：救急医

鈴木 舞（32）（26）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

金城 恵（36）：訪問診療所職員

鈴木 健（52）：外科部長

八木 直久（50）：救命センター部長

新井 亮（29）：町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）：救命センター看護師

田中 徳次郎（85）：肺がん末期患者

田中 慶子（50）：徳次郎の長女

田中 良子（45）：徳次郎の次女

山田 （29）：町田の後輩の救急医

島崎 （30）：町田の後輩の救急医

救急隊員（22）：救急隊員

櫻井（95）：救急搬送患者

キャスター（40）：TVキャスター

訪問診療医（50）：TVのコメンテーター
覚知（50）…居酒屋の店主
森田（50）（35）：舞の当時の受け持ち
患者
医師A（26）：救命救急センター研修医
看護師A（24）：救命救急センター看護師
看護師B（23）：集中治療室看護師
医師B（26）：集中治療室研修医
外科医A（36）：外科部長鈴木の下
外科医B（34）：外科部長鈴木の下
幼児（2）：森田の一人娘

【あらすじ】第一話

救命救急センターで勤務する救急医の町田翼は後輩と共に、救急搬送されてくる高齢者の対応に明け暮れていた。いわゆる医療難民に加え、かかりつけも含めて急変時の治療コードが定まっていない患者が多く、町田や後輩の心身はすり減っていった。

ある日、外科部長主治医の肺がん末期の患者が呼吸不全で搬送されてくる。町田は苦渋の決断で人工呼吸器を患者に装着するが、救命のために施した処置に対して、患者の長女からは厳しい言葉をかけられ、鈴木からは救急医のエゴではないかと疑われる。心が折れてしまった町田は救命センター部長から休暇を勧められる。

休暇中、町田の後輩が企画した飲み会で、大学のサークル仲間と訪問看護師をしている鈴木舞と出会う。舞は、『医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？』

と訪問診療所の連絡先を町田へ渡すのであった。街で偶然にも訪問診療所職員の金城恵の名札を拾った町田は、診療所へ届けることとなる。舞に改めて訪問診療所の見学を勧められた町田は、半ば強制ながら村井院長の診療に同行することとなった。

第1話 「出会い」

○幹線道路（夜）

一台の救急車が走っている。

町田 N 「高齢化社会が加速する日本。2025年には団塊世代が後期高齢者となり、救急搬送が増えている。医療現場の救急医は心身ともにすり減っているのだ」

○前田救命センター・ステーション（夜）

ステーションの机に置いてある救急車受け入れの電話が鳴る。少し荒げに受話器を取る新井亮（29）

新井 「はい、前田救命センター」

救急隊員（22）（声） 「95男性、こちらの呼吸器内科にかかりつけの患者です。呼吸苦の訴えがあります。受け入れ可能でしょうか？」

新井 「ちょっと待ってください」

新井は患者情報をボードに書いて、電話機の保留ボタンを押す。周囲を見渡

す新井。看護師A（24）や医師A

（26）が忙しそうに働いている。町

田翼（32）が白衣を羽織りながら素

早く新井の横に現れて、患者情報の書

かれているボードを見る。

町田「新井、うちのかかりつけだろ？」

新井「まあそうですけど……」

やや不満そうな表情をしながらも、受

話器の保留を解除し受話器を耳にあて

る。

新井「受け入れます、名前と生年月日お願い

しますー」

新井が受話器を耳に、救急隊とやりと

り続けている。

○同・初療室（夜）

新井「ここら辺の夜間の救急病院がうちくら

いしかないのは分かりますけど……。高齢

者の搬送が多すぎませんか？」

うんざりした顔で腕を組んでいる新井。

町田「高齢化社会だしな、しょうがないよ」

町田は、横で軽く笑いながら新井の肩をポンと叩く。

新井「まあ、そうですね……その中身なんですよ」

新井「かかりつけがなくていざ具合悪くなつてから救急車呼ぶとか、治療コードの話を全くしたことがないとか……本当多すぎますよ」

T「治療コード…急変の際にどこまで治療をするかという取り決め」

新井「こんなのがこれからもずっと続いているたら、僕らの心身もちませんよ」

ため息をつく新井をなんとも言えない表情で見ている町田。

○同・初療室（夜）

救急隊員が患者である櫻井（95）を連れて初療室のベッドに移しかえる。

看護師Aが血圧計を巻いて、測定を始

める。高井玲奈（30）が新井と町田のほうを見る。

高井「先生、うちのかかりつけみたいだけど治療コードって決まっているの？」

即座に初療室のパソコンの前に立ち、カルテをチェックする新井。マウスを動かし何かを食い入る様に探しているがコードの記載は見当たらない。患者に酸素マスクを取り付けている町田が新井に声をかける。

町田「どうだ？」

新井「コードの話し合いの形跡ないです……」

新井がうんざりした顔をする。

高井「え、フルコードってこと？」

T「フルコード…急変の際にありとあらゆる救命処置をすること」

一瞬静まり返る初療室。落ち着いた口調で町田が口を開く。

町田「人工呼吸器が今必要な状況ではないでしよ。幸い酸素投与で落ち着きそう。新井、

CT室の手配しておいて」

新井は町田の方を見て頷き、患者移動の準備を始める。呼吸状態が落ち着いてきた櫻井がそばにいる町田の右腕を掴み不安そうな表情をしながら町田を見る。

櫻井「人工呼吸器とか言ったけど、頼むからやめてくれ。亡くなった妻が繋がれて亡くなったのをみて辛かった……頼む」

町田は患者の掴んだ手を優しく剥がして手を握る。

町田「すいません、不安にさせて。今はこの酸素マスクがあれば大丈夫ですから」

高井「町田先生、CT室の準備できました」

町田「ありがとうございます。移動頼む」

医者Aと看護師Aが患者を連れていく。町田はなんとも言えない表情で下を向き、患者を握っていた自身の右手を見つめている。

○前田救命救急センター・医師控室（朝）

寝落ちしそうな表情で椅子に座り、電子カルテを仕上げている新井。新井の頬に冷えた缶コーヒーをあてる町田。

新井「冷た！　ありがとうございます」

新井が町田を見て軽く会釈する。

町田「新井も徹夜？」

新井「そうですね」

町田がふと、ホワイトボードに書かれてある入院患者のリストを見る。75歳以上の高齢者が8割以上となっていて。新井が町田の視線に気づく。

新井「相変わらず高齢者の救急搬送と入院が多いですね。日頃から通院して健康管理していれば防げたかもしれない」

町田「まあ、独居で身寄りがなかったり、体に不自由を抱えていて通院がなかなかむずかしい人たちも増えてきたよな」

新井「医療難民ってやつですよね？」

町田「ああ」

T「医療難民…適切なタイミングで医療を受けることが難しい状態にある人」

新井「現状、僕ら救急医が彼らの受け入れを担っているって、正直貧乏くじ引いてますよね？」

ため息をつく新井を見る町田。

(回想はじめ 一週間前) ○同・救命センタ

ー部長室外観

部屋の扉の前には部長室の札がある。

T「一週間前」

○同・救命センター部長室

八木直久(50)が椅子に座っており、机を挟んで町田が立っている。

八木「町田、話があるって？」

町田「部長、半ば愚痴になるかも知れませんが、救急搬送患者の大半が、かかりつけがないとか、治療コードが決まってない高齢者たちです」

町田「治療コードなんて、うちのかかりつけ

でさえ決まっていなくて、中には悪性腫瘍末期の患者だっています。蘇生側として心身ともに辛いですよ」

八木「まあ、かかりつけ問題については医師会とか周囲のクリニックとの連携を強化している最中なんだ……。治療コードについては、うちの内科や外科にも引き続き投げかけてみるよ」

町田「そのうち僕らの救命処置で望まない人生を送る患者が出ると思うと、正直怖いです」

町田「搬送患者の中には、自分が仮に主治医だったら、何かできたかもしれないって……」

町田の話をお八木は黙って聞いている。

八木「そういえば町田、専門医取って数年なるけど、この後進みたい道とかあるのか？」

町田「まだ次のステップはまだ決まってないです」

スクラブのポケットに入っていた院内

ピッチが鳴り、電話に出る町田。八木に軽く会釈して、部長室を出ていく。

（回想終わり）

○町田自宅・居間（夜）

町田が飲み干したビール缶を机に置く。横には空の数缶のビール缶が散らばっている。

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

ナースステーションに集まっている医師A、看護師A、新井、高井の4人。電子カルテを前に何やら不安げな表情の四人。そこに町田が歩いてやってくる。

町田「どうした？」

新井「さっき受け入れ要請があって、85歳男性の患者なんですけど。酸素投与では保てなさそうな呼吸状態なんです」

高井「この患者さん、外科部長の鈴木先生の

患者で、ステージ4の肺がん末期なんですけど、治療コードの話し合いがされてなそうで……」

町田が救急隊からの情報が書かれたボードの用紙を見る。

町田「新井、ハイフローと挿管の準備頼む。

高井さん、レントゲンとCTいつでも取れる様に手配お願いします」

新井「肺ガン末期の患者を人工呼吸器に繋げるんですか？」

町田「治療方針は俺が家族と話すよ。でも流石に人工呼吸器には繋がらないと思っている」

○同・初療室（夜）

救急隊が田中徳次郎（85）を運んでくる。初療室のベッドに移される田中。かなりの頻呼吸で顔にはびっしょり汗をかいており、苦しくて会話ができな様子だ。看護師Aが急いで血圧測定や酸素飽和度の測定を行う。

高井「先生、リザーバー15Lで酸素飽和度80%しかありません」

新井「ハイフロー装着しましょう」

町田「家族は？」

高井「次女さんが来ています」

○同・面談室（夜）

町田と田中の次女である田中良子（45）が机を挟んで向かい合って座っている。良子の顔は引きつっている。

町田「救急医の町田といいます、はじめまして」

良子「徳次郎の次女の良子です。先生、父はどうなんですか、助かるんですか？」

町田「いま懸命に治療しています。何かお父様の体のことで聞いてますか？」

良子「長女がよく病院に連れてっているんですけど、肺がんで全身に転移しているって……。でも主治医の先生からはここ最近安定しているって……」

町田「お父様はおっしゃる通り肺がんで全身にもガンが転移してます。一見安定しているんですけどぎりぎりの状態で生活されていたかもしれません」

町田「このような形で急に具合が悪くなった際の治療について話し合ったことはありますか？たとえば人工呼吸器の話とか？」

良子「長女からはなにも聞いてません……」

町田「長女様はいまどちらに？」

良子「出張中でさっき連絡したら朝一で戻ってくるって」

町田「少し長女様と連絡取ってみていいですか？電話番号教えてください」

良子「はい、こちらです」

町田はスマホの画面に表示された長女の電話番号をみて、院内ピッチから電話をかけるが応答しない。町田の表情が曇る。

面談室のドアが開き、新井が現れる。

新井「町田先生、ちょっと」

町田「すいません、一旦失礼します」

軽く良子に頭を下げ面談室を出る町田。

そのまま面談室のドアを閉めて新井の顔をみる。

町田「どうした？」

新井「ハイフローでも呼吸不全が進行してます。このままだともたないですよ。救命のために人工呼吸のサポートが必要だと思います、でも……」

町田「……ちょっと待ってて」

再度面談室のドアを開け、中に入る町田。軽く息を吸う。

町田「良子さん、落ち着いて聞いてください。お父様の呼吸状態はいまかなり悪くて命が危険な状態です。救命のためには人工呼吸器のサポートが必要な状況です」

町田「ただお父様の肺や全身状態からは一度人工呼吸器を装着してしまうと、残りの人生お口から管を入れられたまま一生を終えてしまう可能性が高い。そのような人生の

結末をお父様は望むと思いますか？」

良子は涙ぐんでいる。

良子「そんなの……いきなり言われてもわかんないです。お父さん助けてください、先生」

町田「お父様の今後のお姿を考えると人工呼吸はおすすりめできません。呼吸苦を緩和する治療も――」

俯き気味だった良子がパッと顔をあげ鋭い表情で町田の言葉を遮る。

良子「先生は父を見捨てるのですか？」

町田「そうは言っていないません」

良子「だったら助けてください、先生は救急医なんですよ、お願いしますよ！」

町田に向かって泣きながら頭を何回も下げる良子。なんとも言えない表情で面談室の壁を見つめている町田。

○同・初療室（夜）

軽く俯きながら足取り重く入ってくる

町田。

新井「先輩？」

町田「新井……人工呼吸器につなげる」

一同驚いた表情で町田をみる。数秒間の沈黙が流れる。

高井「患者さん肺がん末期じゃないんですか？」

町田「そうだよ……」

新井「いわゆる延命処置ってことですか、先輩？」

町田「家族と話し合って救命を優先することになった、フルコードだ」

○同・集中治療室（朝）

人工呼吸器に繋がれた徳次郎。首や手には点滴の管がつながっている。

高井がモニターをチェックしている。酸素飽和度のアラームが鳴る。突如モニターの心拍数が徐々に落ちていく。気づいた高井が慌てて徳次郎の首に手

を触れる。脈が触れない。

高井「ドクターコールお願い、心停止！」

高井が患者の心臓マッサージを始める。

医師B（26）、看護師B（23）、が

駆けつける。看護師Bが高井と心臓マッ

サージが変わる。変わった直後に新井と

町田が勢いよく入ってくる。

町田「どうした？」

高井「1分前に心停止」

新井「初期波形は？」

高井「PEAよ」

町田「わかった。俺は気道側に回って指揮を

取る。新井、原因検索を頼む。高井さん

アドレナリン1A i vして」

懸命に蘇生が続けられている。看護師

Bと医師Bが心臓マッサージを交代し

て続けている。壁の時計の針が十分経

過する。

町田「新井どうだ？」

新井「採血では原因特定できなさそうです。

ただ直前に酸素飽和度が下がるイベントがあつて……これ見てください」

新井が患者の胸にエコーをあてて心臓を描出する。町田の顔がこわばる。

町田「……肺塞栓？」

新井「心停止原因だとしたら」

町田「厳しいな……」

顔を見合わせる町田、新井。高井がカーテンを開けて入ってくる。

高井「家族来てるわ」

町田「入れてくれ……」

高井に案内されて長女の慶子（50）

と次女の良子が入ってくる。

彼女らの目の前には複数の管に繋がれた徳次郎、懸命に心臓マッサージを行っている医療従事者の光景が広がっている。町田がゆっくりと近づく。

町田「懸命な蘇生処置をしますが……」

慶子「もうやめてください！」

悲痛な叫びが蘇生メンバーの手を止め

る。彼らは驚いた表情で慶子を凝視している。

慶子「どうして父はこんな姿になっているんですか？　先生どうして父にこんな苦しい思いをさせているんです？」

良子「先生は命を助けて――」

感情的になっている慶子に良子の声は聞こえていない。

慶子「命を救うため？　こんなに管に繋がれて父が最後を迎えるなんて……もういいです」

慶子は足早に父親のベッドの横に駆け寄り、膝から崩れ落ちて泣いている。

呆然と立ち尽くしている町田。

新井がおそるおそる声をかける。

新井「先輩？」

町田は、ベッドの横にいる長女と次女らに軽く頭を下げ、カーテンを開けて病室から無言で出る。

○同・医師控室（朝）

椅子に腰掛け、下をむいて座っている町田。目の前に、紙コップに入っているコーヒーが置かれる。顔を上げる町田。机の上に座っている新井。

町田「ありがとう」

新井「先輩、全然悪くないですよ。後からああいう言い方するなんて家族も卑怯ですよ。そもそもあんなギリギリで生きていた患者に治療コードを詰めない外科が――」

町田「新井」

新井の言葉を目で制する町田。町田の視線の先には、黒いスクラブの上から白衣を着ている外科部長の鈴木健（52）が立っている。緑の手術着姿の外科医A（36）とB（34）が部長の後ろに立っている。

町田「鈴木先生」

鈴木「町田先生、僕の患者が世話になったみたいだね。結果は残念だったけど、懸命に

蘇生してくれたとか」

軽く会釈する町田。

町田「力及ばず申し訳ないです。患者の引き継ぎがあるので失礼します、新井」

新井に目で合図して、新井と共に控室から出ようとする町田。

鈴木「長女さんに会ったよ。次女と話して人工呼吸器をつけたんだって？私も驚いたけどね。まさか救急医の先生のエゴではないよね？」

町田の右手が震え、握っていた紙コップがグシャグシャに潰れる。目の奥に怒りを灯しながら鈴木の目を見る町田。

町田「お言葉ですが……先生たち主治医が彼のような患者の治療コードを事前にお話になっていないから、今回のような問題が生じるのではないのですか？」

新井「先輩……」

新井が町田の左手を掴むが、町田は振り払う。黙って聞いている鈴木。

町田「僕ら救急医は先生たちの尻拭いではありません。失礼します」

出ていく町田。外科医らに軽く会釈して町田の後ろを追う新井。

○同・救命センター部長室

八木救命センター部長がデスクの前の椅子に座っている。目の前に立っている町田。

八木「外科となんかあったって？ 鈴木部長には、小言言われたけど、フォローしといたよ」

町田「……ありがとうございます」

八木は町田が死んだ目をしていることに気付く。

八木「町田、そういえば夏季休暇とってないだろ？まだ申請ないのがうちの部でお前だけなんだ」

椅子から立ち上がり窓の方に目をやる八木。

八木「一週間ほど休みなんていうのはどうだ？」

町田「俺は大丈夫です、働きます」

八木「そういうと思った」

苦笑いを浮かべる八木。

八木「明日から院外に出ていた新井の同期も

何人か帰ってくる。お前の穴は大きいけ

ど、みんなでカバーする」

八木「休みを取らせるのも俺の仕事よ」

八木は微笑んで町田を見る。

町田「……」

○町田自宅・外観（朝）

静寂の中で小鳥のさえずりが響いている。町田の玄関前にはお酒の空き缶が詰まっているゴミ袋が置かれている。

○町田自宅・居間（昼）

買い込んだ缶ビールやスナック菓子が袋いっぱい居間の机に置かれている。

数個の空き缶が机の上に散らばっている。床に座っている町田が、新しい缶ビールのプルタブを開ける。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

新井がステーションの机の前に座ってパソコンを操作している。右横の椅子に腰掛ける山田（29）。新井の肩を叩く山田。

山田「久しぶり、新井」

新井「お、山田じゃん、院外研修どうだった？」

山田「うちと違って迷わず蘇生みたいな救急患者が多かったからな。勉強になったよ」

新井「うらやましいなあ。」

山田「確かにうちは、ギリギリの患者が治療方向性が決まっていなくて、受ける俺らも本当大変だよな」

新井「だよな」

勤務予定表が貼られているボードをみ

ている島崎（30）。勤務予定表の中で誰かを探しているが、見つからない様子。

島崎「ねえ、町田先生は？ シフト表に名前がないんだけど」

山田「そいえば、たしかに！」

パソコンのキーボードを打つ新井の手が一瞬止まる。

新井「一週間休暇だって」

島崎「え、あの仕事大好き町田先生が？」

新井「部長に聞いたら、有給溜まりすぎて管理職が怒られるから、しぶしぶ取らせただって」

新井「俺、ちょっと休憩行ってくるから」

席を立ち、そそくさと去ろうとする新井。顔を見合わせる山田と島崎。

○同・医師控室（昼）

三人が紙コップのコーヒーを片手にソファーに座っている。

山田「……そんなことがあったんだ」

新井「まあ休暇と関係あるかは知らないけど」

島崎「まあ町田先生は私たち後輩思いでいつも、初対面の患者でストレスかかるような面談も数多く自分でやっていたからね」

新井が頭を掻きむしる。

新井「でもその面談も主治医が本来やっておくべきで、町田先輩がやらなくてもよかつたはず……」

山田「僕らの前では、ほんと頼りがいがあった目標の救急医の先輩だったけど、色々溜まっていたのかな……」

医師控室の電話が鳴る。島崎が受話器をとる。

島崎「患者くるって」

山田「新井、いこう」

新井「おう」

二人が控室を出ていく。ふと何かを思ったのか、立ち止まり、ポケットからスマホを取り出し、誰かにメッセージ

を送っている新井。

○町田自宅・居間（夕方）

自宅でベッドの上で横になりながらスマホをいじりながら、画面を見ている町田。そこにラインの着信音と共に、画面の上部に新井からのメッセージが表示される。

新井（声）「先輩、お疲れ様です。山田と島崎も久々に帰ってきたんで、飲み会しましょう。先輩の可愛い後輩達ですよ！明日、十九時、空けておいてください！」

文面を見て鼻で笑う町田。

町田「新井……」

町田がスマホで返信を返す。

○町田自宅・居間（夕方）

着替えている町田。クローゼットの扉を開けると、扉が隣の棚にあたる。衝

撃で棚から一枚の色紙が落ちてくる。
ふと落ちてきた色紙に目をやるが、大
学サークル時代のものだとわかると、
気を止めず、すぐに棚に直す。
つけっぱなしだったTVから流れてく
る音声に気づき、思わず画面を見る町
田。

○テレビ局 スタジオ（昼）

キャスター（40）と訪問診療医（50）
が話をしている。

キャスター「2025年の問題もはじめ、日
本の高齢化社会が加速していますがこの先
の日本の医療の行末を、訪問診療医の先生
はどう考えていますか？」

訪問診療医「病院やクリニックにおける外来
の需要・供給バランスも考慮すると、医療
難民がさらに増え、医療の場が自宅や施設
になっていく患者さんが増えていくでしょ
うね」

○町田自宅・居間（夕方）

町田がテレビのリモコンをとってTV
の電源を消す。

○同・団体席（夜）

盛り上がっている室内に入るため、暖
簾をくぐる町田。中では新井、島崎、
師A、看護師Aが盛り上がっている。

新井「先輩、おそいつすよー」

島崎「町田先輩、どうぞ」

ビールの生ジョッキを渡される町田。

町田「元気だな、相変わらず。山田は？」

島崎「下戸なんで今日は当直やるって言って
ましたよー」

新井「休暇中の町田先生に乾杯！」

一同乾杯の声をあげる。

少し場の陽気な雰囲気戸惑いながら
も、ビールを一気に飲み干す町田。

○同・カウンター席（夜）

町田が一人カウンターに座っている。

目の前に焼酎の瓶が置いてある。

一人、粛々と焼酎の水割りを飲む町田。

○同・団体席（夜）

酔った新井が高井に絡んでいる。

それを横目に見ている島崎。

新井「高井さん、ほんときれいですよね。い

やー彼氏とかいないんですか？」

高井「いない」

淡々とお酒を飲んでいる高井。

新井「えー、僕と付き合ってくださいよお」

軽くボディタッチを凶ろうとする新井。

新井の手を、島崎が叩く。

島崎「新井、あんた今の時代、三回は訴えられてるから！」

新井の顔を指さす島崎。

新井「なんだよ、厳しい世の中だな」

面白くなさそうな表情で席を立つ新井。

○同・カウンター席（夜）

新井がカウンターに座っている町田を見
つけ、町田の左隣に座る。

新井「せんぱーい、お疲れ様っす。相変わら
ず酒強いっすね。今日は飲みましょ」
酔って呂律が回っていない新井。

町田「新井、飲み過ぎだよ」

新井「全然、酔ってないです。俺の先輩いな
くて寂しいです。戻ってきてくださいね」

町田に抱きつこうとする町田の右隣に、
新井の頭を叩きながら、颯爽ときて座る

島崎。

島崎「先輩目標にしている後輩は多いんです
からね。戻ってきてまた一緒に働いて、
色々教えて欲しいです」

町田「ありがとう」

彼らの言葉を受けて表情が少し緩んで
いる町田。団体席へ戻っていく新井と

島崎。

○同・玄関（夜）

扉が開いたことを知らせる鈴の音。

凛々しい女性、鈴木舞（30）が立っている。居酒屋店主の覚知（50）が舞に声をかける。

覚知「いらっしやい！」

舞「まだやっていますか？ 今日はやけに賑やかですね」

覚知「舞ちゃん久しぶりだね」

町田の左隣のカウンターに一つ空けて座る舞。

舞「生ビールもらえますか？」

覚知「はいよ、お待ち」

覚知が、舞の前にビールを置く。
出されたビールを飲み始める舞。

舞「やっぱ久々の生ビールは最高ですね」

覚知「仕事忙しいのかい？」

舞がビールのジョッキを机の上に置く。

舞「そうですね。訪問看護の仕事は呼びだし

も結構あるから……今日は久々の休みなんです」

覚知「頑張っているんだね」

訪問や看護という言葉が少しばかり気になって聞き耳を立てる町田。

舞「でも、患者さんの生活に深く関わられるから私は好きかな」

覚知「舞ちゃん、次も生でいい？」

舞が頷く。舞が飲んだ空のジョッキを覚知に渡そうとして誤って、右方向へ倒してしまう。ジョッキの中の氷が、町田の方向に転がっていきまう。少し驚いた町田は思わず、席を立ち上がる。

覚知「すいません、お客さん」

町田「大丈夫です」

舞「すいません、自分も手が滑ってしまっ
て思わず目があう町田と舞。

お互いの顔を数秒見つめている。

舞「町田先生？」

町田「鈴木？」

舞が口を開こうとした瞬間、そこへ新井が現れ、町田に肩を組む。

新井「先輩、二次会カラオケになりました」
思わず横にいる舞を見る。

新井「めちゃくちゃ美人じゃないですか、先輩の知り合いですか？」

町田「……」

舞「大学のサークルの同期です」

新井「まじっすかぁ。最高じゃないですか。

お名前は？」

舞「舞です」

新井に戸惑いはじめた舞を見て、町田は新井の肩を掴んで引き寄せる。

町田「新井、これで会計して先に二次会いけ」

新井「りょうかいです、先輩今度、合コン作ってくださいね」

新井をはじめ、飲み会のメンバーは店の外へ出ていく。静寂を取り戻しつつある店内。

舞「町田先生、私の卒業式以来よね？」

町田「ああ、サークルの追いコンだったけ？」

懐かしいね」

舞「町田先生、今どこで働いているの？」

町田が自身の飲んでいるグラスを飲み

干し、机に置き一呼吸置く。

町田「前田救命センターで救急医をしている」

舞「三次の救命センターじゃん、すごいじゃ

ん、私のお父さんもその病院で働いている。

偶然だね」

町田「え、お父さんって？」

舞「いちおう外科の部長している」

町田「鈴木健先生？」

舞「そう」

思わず噎せる町田。

町田「あ、お父さん最近なんか言っていた？」

舞「特に何も言っていなかったけど、どうかし

た？」

○同・カウンター席（夜）

何やら町田が舞に対して話している様子。
子。

舞「へえ、そんなことあったんだ……」

町田「そうなんよ」

舞「気にしないで。治療コードを決めていな

いお父さんが悪いと思う」

ジョッキを机に置く。舞の目が据わっている。

町田「そうなんだ。鈴木はどうして訪問看護師になろうと思ったの？」

舞「急性期病院の時、外科病棟で看護師していたの。私の受け持ちに森田さんって患者がいたの」

舞は残っているビールを飲み干す。

舞「店長、もう一杯生もらえますか？」

覚知「舞ちゃん、飲み過ぎなんじゃない？」

舞「大丈夫」

舞の前に新しい生ビールジョッキが置かれる。それを手に取る舞。

舞「森田さんは当時、ステージⅣの膵臓癌で

入退院を繰り返していた。化学療法も長いことやってたけど、自分の体が徐々に限界に近づいていることが分かっていたのよね」
黙って聞いている町田。

○（回想はじめ 4年前）外科病棟（昼）

ナースコールが鳴る。かけつける当時の鈴木舞（26）

舞「どうしました、森田さん？」

ベッド上の森田が、身をかがめてベッドの下にあるものを取ろうとしている。

森田「ほんと、舞ちゃんすまんね」

舞「あんま無理しないでくださいね」

舞は自らがんで、ベッド下にある一枚の写真を見つける。

舞「これですか？」

森田「そうそう」

拾った写真を森田に手渡す。一枚の写

真には、若い頃のコック姿の森田（3

5）と幼児（2）が一緒に写っている。

森田「俺の一人娘なんだ。若い頃の料理人の俺はさっぱりダメでね」

舞「森田さん、娘さんいたんですね」

森田「食べねえってかみさんが、娘を実家に連れて帰ってもう15年近くか」

森田「来週頭には娘が成人式かなんかで、ここに帰ってくるらしい」

舞が神妙に話を聞いている。

森田「一生懸命治療してくれているが、主治医には、俺の体はいつどうなってもおかしくないって言われてな……」

森田「だったらまだ手足が動くうちに、帰ってくる娘に、せめて家で手料理くらい作ってやりたいんだよ」

写真見て軽く笑う森田。

（回想終わり）

○居酒屋・カウンター席（夜）

町田「それで森田さんはどうなったの？」

舞「森田さんの願いは結局叶わなかった。主

治医の先生から、自宅療養は急変リスクがあるし、少しでも長く生きたいのなら入院続けて今の治療を続けるべきだって強く言われてね」

舞「それからしばらくして森田さんは亡くな
ったわ」

町田「そうなんだ……」

舞「それから私は、患者の人生をもっと大切にしたいと思ったの。だから今は訪問看護
をしている」

町田「患者の人生を考える……か」

舞「先生は救急医で初めての患者を相手にする
ことが多いと思うけど、患者と接してき
た主治医はちゃんと向き合うべきだと思
う」

町田「確かに向き合えば治療コードも自然と
決まってきたそうだね……でも現実はでき
ていない」

町田は、ため息をついて何かもどかし
さを感じている。

○居酒屋・玄関前（夜）

外に出た覚知が、玄関に掛かっている
『営業中』の札を裏返し、『支度中』
に変えて、店の中に戻る。

○同・カウンター席（夜）

舞「町田先生は、この先何かやりたいこと決まっているの？」

町田「部長にも言ったけど、正直まだ決まっていないんだよね……」

舞「訪問診療とか興味ある？」

町田「訪問診療？」

舞「色々な事情で病院の外来に通えない人の生活の場に伺って主治医として医療を提供したり、相談の窓口になったりする。彼らの生活の中で医療がサポートをするイメージかな」

町田「確かテレビでもこれからの時代、医療難民がさらに増えるって言っていたな。でも何で俺に？」

舞「先生のさっきの表情、自分が主治医だったら何かできることがあるはずって顔に見えたけど……」

ハツとした表情を浮かべる町田。

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」

舞がカバンの中から一枚の名刺を出して、町田の座る机の上に置く。

名刺には、『村井訪問診療所』と書かれており、連絡先が載っている。

町田「村井訪問診療所？」

舞「一回見学行ってみてほしいな」

町田は、渡された名刺にもう一度目をやる。

○居酒屋・玄関前（夜）

玄関から扉を開けて出てくる町田と舞。

目の前に止まっているタクシーの後部

後部座席の扉が開き、乗り込む舞。扉

が閉まりタクシーは去っていく。タク
シーを見送る町田。

○商店街・アーケード（夜）

ひとり商店街のアーケードを歩いてい
る町田。携帯の着信が鳴り、上着のポ
ケットからスマホを取り出す。スマホ
の画面には新井の名前が表示されてい
る。

町田「もしもし」

○カラオケ・団体個室（夜）

医師や看護師がお酒を飲んだりして騒
いでいる。マイクをもって楽しそうに
歌っている島崎。カラオケボックスの
扉を開けて、スマホを耳にあてながら
ジョッキを片手に外に出る新井。

新井「先輩、遅いですよ。いまどこですか？」

町田（声）「さっきの居酒屋から出たところ」

新井「本当ですか？ 実はあるの可愛い舞ちゃん

の家にいるとか……」

ニヤけながらジョッキに入っているビ

ールを飲む新井。

町田（声）「外科部長の娘のこと？」

思わずビールを吹き出してしまう新井。

新井「外科部長の娘？」

町田（声）「うん」

新井「まじっすか……」

一瞬、顔を落とす新井だが、すぐに顔

をあげる。

新井「鈴木の子の娘の事はどうでもいいんですよ。

先輩、早くきてくださいよ、待っています

からね」

町田「わかったから。場所送って」

○商店街・アーケード（夜）

電話を切る町田。町田はスマホの画面

をみながら歩き始める。

○商店街・アーケード出口（夜）

町田はスマホの画面を見ながらアーケードの出口を出て住宅街に入る。左から颯爽と小走りに走ってくる金城 恵（36）。町田とぶつかり、よろける金城。金城がかかえていた袋から物品が散らばる

町田「すみません！ 大丈夫ですか？」

金城「ごめんなさい、そちらこそ大丈夫ですか？」

町田「大丈夫です」

金城は、袋から散らばっている物品を集めて袋に戻し、再度小走りで去っていく。歩き始めた町田は靴の底に何かを感じる。靴をどけると、プラスチックのネームプレートが落ちている。拾い上げる町田。スマホのライトで照らすとネームプレートには『村井訪問診療所 アシスタント（看護師）金城恵』と書かれている。何かに気づいた町田がスボンのポケットから舞に渡され

た名刺を出す。

○町田自宅・玄関前（朝）

玄関の鍵を開けて入る町田。

○町田自宅・居間（朝）

シャワーを浴びて着替えて今に入ってくる町田。着ていた上着やズボンのポケットをチェックして、名刺とプラスチックのネームプレートを取り出す。取り出したネームプレートと名刺を並べて机の上に置き、居間にあるベッドで横になる町田。

○町田自宅・居間（昼）

居間に座って携帯の地図のアプリで村井訪問診所を検索する町田。

○住宅街・通り（昼）

時折スマホを見ながら歩いている町田。

角を曲がり、顔を上げ、歩くスピードを徐々に緩めて立ち止まる。

目の前に古いプレハブが建っている。

『村井訪問診療所』と書いてある立

札。村の表記だけが新しい感じがする

が、気に留めず玄関へ向かう町田。

○村井訪問診療所・玄関前（昼）

玄関の前にある呼び鈴を鳴らす町

田。

金城（声）「はい、村井訪問診療所です」

町田「すいません、落とし物届けにきました、

町田と言います」

玄関の扉が開く。町田の前に金城が立

っている。

町田「すいません、昨日夜に拾ったんですけ

ど……」

ポケットからネームプレートを出し、

金城に見せる町田。

金城「ああ、無くなってたから探してたの。

ありがとう。町田さん、昨日もしかして――

金城が町田の顔を見ている。

舞「金城さん、頼んでいた点滴ってあと何箱でしたっけ？」

点滴類が入った段ボールを抱えて玄関に姿をみせる舞。

舞の姿に思わず目をやる町田。

舞「町田先生じゃん、来たんだ」

町田「おう……」

軽く片手を挙げながら町田は奥にいる舞に挨拶する。

金城「無くしたネームプレート、届けに来てくれたの。舞ちゃんの知り合い？」

舞「大学の時のサークル仲間で、今は前田救命センターの救急医なんです」

○村井訪問診療所・応接室（昼）

ソファーに座っている町田。金城が机の上にお茶とお菓子を置く。

金城「ごめんね、こんなものしかないけど」

町田「いえいえ、お気遣いありがとうございます
ます」

金城「救急医って忙しくて大変よね。今日は
お休み？」

町田「今、休暇中……」

金城「わざわざ休暇中にごめんね」

町田「いいんですよ」

町田が診療所の内観を見渡す。壁に飾
っているいくつもの患者からの感謝の
手紙が目に残る。手紙を見ている町
田に気付く金城。

金城「うちの医療は生活の場でできることだ
から、病院みたいに大掛かりな手術や処置
はできないけど、意外かもしれないけど患
者からは感謝されるのよね」

黙って聞いている町田。
点滴の入った段ボールを運んでいる舞。

舞「町田先生も、いろいろあるみたいだし、
訪問診療の見学してもらったらどうです」

か？」

金城「いろいろあるの？」

町田が以後の発言を遮るような鋭い視線で舞の方を見る。

町田「鈴木」

舞「ごめん、つい……」

金城「院長に聞いてみるね、大歓迎だともうよ」

町田「せっかくの申し出で嬉しいのですが、大丈夫ですよ」

舞「いいじゃない。先生今週いっぱい休暇だけど予定ないって言っていたし——」

町田が再度、鋭い視線で舞の発言を遮る。

舞「あ、ごめん」

町田「休みとはいえ、勉強しないとイケないことも多いんで。僕はこれで失礼します。ご馳走様でした」

軽く会釈して玄関の扉を開けて出ていく町田。

○町田自宅・居間（夕）

町田が居間に座ってテレビを見ている。

町田の携帯のラインの到着メッセージ

が表示される。鈴木舞の表示がされる。

メッセージを開封する町田。

舞（声）「町田先生、今日昼は喋りすぎたか

も。ごめんね。金城さんが院長に聞いたら、

明日九時から同行見学大丈夫だって」

町田 M 「鈴木をやっ……」

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田。若干躊躇しながらも

右手で呼び鈴を鳴らす。玄関が開く。村

井正和（50）が立っている。

町田「はじめまして、診療見学に来た町田と
申します。」

村井「院長の村井です。話は聞いています、
どうぞ」

町田が診療所に入り、ドアが閉まる。

(第二話 「決意」に続く)